



大原美術館での幼児教育。
美術と親しんで育つこの子たちは、ひとかどの大人に育つに違いない。

「文化」を 少し考えてみよう



公益財団法人大原美術館理事長

大原 謙一郎氏
おおはら けんいちろう

今、日本は、新しい世界秩序の中での自国の立ち位置を改めて構築し直すべき時に来ている。そういう時に、ビジネスに関わる人たちに思い出してもらいたいことがある。

それは、日本が敗戦後の廃墟の中から立ち上がり、占領から脱して国際舞台に再登場しようとしていたころ、満を持して世界に送り出した大掛かりな「欧州巡回日本古美術展」と「アメリカ巡回日本古美術展」である。

その頃、敗戦国日本に注ぐ世界のまなざしはまだ冷たく厳しかった。戦争を戦い抜く国力や戦力だけでなく、国民性や倫理性にまで懐疑の声があがっていた。そのような雰囲気にもまれて進める新しい国づくりは茨の道の連続に思われた。

そのような時に、日本復興の重責を担ってきた吉田茂総理とその後継者たちが企画し敢行したのが、この、空前の規模で国宝重文をよりすぐった「日本古美術展」だった。

当時の日本はまだまだ「食うや食わず」の状況だった。その頃高校生だった私は、ある時、米軍から放出された「ハンバーガー」をはじめて友人の家で口にし、その美味なることに驚嘆した。それほ

ど、私たちの日常の食生活は貧しかった。

そういう時代に「日本の古美術の最良の精華を世界の識者に問う」ことを決断させたものが何だったか、私は詳しくは知らない。しかし、それは驚くべき英断だった。これに接したヨーロッパやアメリカの人たちは、もはや日本に対して冷たく厳しいまなざしを注ぐことはなかった。逆に、彼らの視線には共感と敬意が感じられるようになった。

これが、逆風の中で新しい国づくりを進める日本にとってどんなに大きな後ろ盾になったかは、計り知れない。この展覧会は、国が大きく変わろうとしている時に、「文化こそが国の立ち位置を決める」ということを実証したと言って良いだろう。

戦後の復興期、「文化の力」は日本の国の進路を決める上で大きな貢献をした。同様に、今、新しい国際秩序の中で新しい立ち位置を模索する日本にとっても、文化の力は大きな支えとなるに違いない。

国が大きな変化に直面する時、「文化」の持つ意味と意義は重く大きい。そのことを忘れ、国全体が即物的な科学技術一辺倒に走ってしまったら、国の未来は危ういと私は思う。